

# 「アースデイとやま 2021」 全体報告

## ■はじめに

「アースデイとやま」は 1991 年以降富山県内各地で 5 月前後に毎年開催され、市民の手によるものとしては県内最大の環境啓発イベントとして、環境問題への取り組みや市民団体の連携についてさまざまな成果を上げてきました。しかし、昨年の「アースデイとやま 2020」は新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）対応のためにこれまでまったく例のない 9 月末のオンライン開催の形での実施となり、本年も当初は例年通り 5 月末の開催を予定し準備を進めていましたが、直前に 10 月への延期となり、さらには再びオンラインでの開催に変更となりました。そのため後援をお願いし、ご了解をいただいていた諸団体の皆様方にもその度にご連絡を差し上げることになり、大変心配をおかけしたかと存じます。来年は従来通り対面で開催できることを期待しつつ、本報告書を提出させていただきます。ご覧いただけると幸いに存じます。

## ■アースデイとやま 2021 開催の背景について

全世界のアースデイは 1970 年にアメリカ合衆国で開催されたものが第 1 回とされ、今年はその 51 年目、新たな出発の機会となる重要な年でした。本来であれば、これまでのアースデイの流れを振り返るような包括的なテーマのアースデイが世界各地で行われるはずでしたが、昨年同様に新型コロナの世界的な大流行によって、環境問題が地球規模で年々厳しさを増しているにもかかわらず、従来と大幅に異なる状況になったのは大変残念なことでした。新型コロナの影響は、昨年同様人類社会の随所に及んでおり、それはさまざまな側面から環境問題の解決、緩和に取り組む私たちアースデイの関係者も例外ではありませんでした。日本各地のアースデイの取り組みに関わる人々の一部が、今年度になってアースデイ・ジャパン・ネットワークという組織を立ち上げ、世界各国のアースデイの仲間への情報発信や国内での現状把握などに向けて活動を開始していますが、その議論の中でも各地で行われてきたアースデイの活動の停滞や減少が語られており、これまで屋外での対面開催を前提とすることの多かったアースデイにとって、こうした傾向は新型コロナの影響と無関係なものではないでしょう。

アースデイの取り組みは生物多様性を含む自然環境の保全、食の改善を通じた人々の生命や健康の維持増進、第一次産業の振興による均衡のとれた産業の発展、自然環境を素材とした健全な教育の推進、里山のような環境基盤の保全による健全な地域づくりなど多岐に渡り、それは結果的に SDGs の 17 目標の多くに関わっています。アースデイとは、この名の元に行われるそのような広範囲な環境活動の総体を差すものであり、単なる環境啓発イベントではありません。しかしながら、従来のアースデイとやまがそうであるように、ワークショップのような体験型・参加型の活動を中心した屋外での開放的な雰囲気でのイベントは、アースデイの最も大きな特徴であり、私たちはこれまでのそうした継続的な取り組みによって、大きな成果が得られてきたと考えています。こうした活動に新型コロナは多大な影響を及ぼし、私たちはいつも限られた時間や労力の元に進めているアースデイのイベントの準備の中で、昨年以降繰り返し延期や開催形態の変更を迫られてきました。

一方、新型コロナの世界的な流行の中で、第一次産業や教育などエッセンシャル・ワークと呼

ばれる人々の生活基盤の存続にとって最も基本的な営みの価値が見直され、大都市への一極集中の負の側面が改めて浮き彫りになり、ネット環境を駆使した人のつながりを促すしくみが広がるなど、結果的にアースデイの取り組みにとって追い風となるような動きもいくつか見られました。今後の私たちの暮らしがどのようなになるか予測は困難ですが、仮にコロナ禍が収束に向かった時、このような追い風が一時的なもので終わってしまうことにならないような取り組みが必要です。

## ■アースデイとやま 2021 のテーマについて

こうした背景を踏まえて、私たちは今年のテーマをアースデイとやまがこれまでに取り組んできたさまざまな課題の中から、新型コロナの影響やそれへの対応を含めて、市民の生活に密着した問題をいくつかの視点から取り上げるものにしようと考えました。それらの視点は、

- 1) 第一次産業      2) 教育      3) 地域づくり

の 3 つに絞られましたが、これらはいずれも新型コロナによってさまざまな影響を受けており、同時にその影響によって新型コロナの流行以前から指摘されていた問題も深刻さを増しています。しかし、そうした問題に直面してもなお、私たちはいつも前向きな姿勢を大切にしていかなければなりません。これらのことを端的に表す標語として、私たちは「今こそ、いのちと暮らしが輝くために」を掲げることにしました。結果的に、地域に根ざした環境啓発に取り組んできたアースデイとやまの、アースデイ 51 年の節目の年のテーマとしてもふさわしいものになったと考えています。

## ■アースデイとやま 2021 実行委員会の運営体制、活動の経緯について

アースデイとやま 2021 の運営や活動を支える主力となる構成員の顔ぶれは、2020 年度から大きな変化がありませんでしたが、事務局長が「市民いきものメイト」の中沖修一氏から富山大学の遠山和大氏に変更になり、若返りが図られました（中沖氏は副実行委員長）。また、最終的にオンライン開催での 3 つのトークのホスト役となった 3 名の企画担当者の積極的な取り組み、昨年度と同様の情報通信技術にスキルを有する構成員の貢献、ホスト会場となった光教寺の関係者の努力が今年度の活動を支えていました。一方、2 年連続のオンライン開催となったことで、会場での対面開催を支える多数の出展・出店者や大学生を中心とするボランティアの皆さんにはほとんど活躍の場がなく、これまで長年にわたりアースデイとやまを支えてきたそれらの人々とのつながりの維持や再構築が、今後の大きな課題となりました。昨年度と異なり、当日の直前まで対面開催の予定で進んでいたため、出展・出店者の募集、ポスターの印刷・配布、会場配置図の作成、出展・出店者説明会の開催など、実施したものの本来の目的を果たせなかったことも数多くありました。

実行委員会の会合は、次頁に列举するように、例年のように昨年 12 月に 2 度の準備会を開き、その後オンラインでの実行委員会を合計 20 回開催し、企画担当者を中心とした 3 回の検討会（オンライン開催）を実施し、今年 11 月 7 日の対面式の反省会まで、近年のアースデイとやまにおいては他に類を見ない回数になった昨年度（16 回）を、さらに上回る回数になりました。その大きな理由は、当初対面式での開催を計画しており、新型コロナの蔓延を考慮して開催直前の 5 月下旬に延期となり、さらに 8 月下旬にも同じ理由からオンライン開催への変更を決定し、開催の

時期や形態の変更の度に企画や情宣活動の立て直しを迫られたことでした。また、当初の対面式の開催のために新型コロナにどのように対応するかを、会場となる予定であった富山市ファミリーパークの担当者と時間をかけて繰り返し話し合ったことも一因となっています。実行委員会の会合は最後の反省会を除いてすべて ZOOM を用いたオンラインで開催されており、2020 年度の開催場所がサンシップとやま→オンライン開催→くれは山荘→再度のオンライン開催→再度のくれは山荘と二転三転したものと較べると、昨年度の経験が活かされていました。

#### 実行委員会開催記録（開催日、人数、主要な議題；赤字は特に重要な決定事項）

準備会：12月4日（水）、参加者数不明、および12月25日（水）、8名、テーマ案（複数）など  
第1回：1月13日（水）、7名、準備会の経過報告、テーマ・事務局体制の検討、今後の進め方など  
第2回：1月20日（水）、8名、実施計画など作成、**テーマの決定**  
第3回：2月2日（火）、8名、実施計画案の検討、ホームページの移転、Facebook についてなど  
第4回：2月9日（火）、6名、実施計画書の検討、企画検討会開催の提案  
第5回：3月4日（木）、10名、アースデイ・トークの企画、ポスター案・企画書の検討など  
第6回：3月12日（金）、6名、実施計画書・企画参加要項の検討、スケジュールの確認など  
第7回：3月29日（火）、10名、ポスターの印刷枚数、チラシ裏面の内容、予算、参加要項案など  
第8回：4月14日（火）、10名、当日の新型コロナ対策、企画参加者の募集、タイムテーブルなど  
第9回：4月21日（水）、11名、当日の新型コロナ対策（雨天時含む）、ポスター・チラシ内容確認  
第10回：4月26日（月）、10名、当日の新型コロナ対策、ポスター内容最終確認、ほか  
第1回企画検討会：5月6日（木）、7名、にいかわアースデイの情報、出展・出店者の状況  
第2回企画検討会：5月7日（金）、6名、出展・出店者の確定、実行委員会企画の検討、情宣など  
第11回：5月10日（月）、9名、出展・出店者の確保・説明会実施、参加要項改訂、実行委員会企画  
第3回企画検討会：5月12日（水）、4名、トークセッションの進め方など  
第12回：5月14日（金）、9名、出展・出店者説明会の準備と開催、当日の準備・会場配置など  
第13回：5月19日（水）、11名、当日までの準備、当日の役割分担、ボランティア関連など  
第14回：5月24日（月）、12名、**新型コロナ感染拡大への対応、日程の変更（延期）** など  
第15回：8月24日（火）、13名、**開催形態の検討（オンライン開催の決定）**、後援団体との関係  
第16回：8月31日（火）、8名、後援団体への連絡当日のタイムスケジュール・運営形態、情宣  
第17回：9月8日（水）、8名、プログラム、併催行事、予算案改訂、関連団体紹介、情宣など  
第18回：9月24日（金）、8名、情宣、トークセッション・団体自己紹介コーナーの内容検討など  
第19回：10月4日（月）、7名、情宣（ホームページ掲載記事）、団体自己紹介コーナーの検討など  
第20回：10月14日（金）、10名、参加申込の状況、放課後タイム（トークセッション）、反省会  
第21回（反省会）：11月4日（木）、8名、当日の様子や感想など、開催後の実行委員の近況など

#### ■アースデイとやま 2021 の広報活動について

本年の広報活動は、昨年度と同様に新型コロナ感染症の影響を非常に大きく受けました。日程の延期や開催形態の変更の前には、例年のように5月末の開催に向けてポスターとチラシの印刷、配布を行いましたが、開催の直前に10月への延期、その後オンライン化が決定したためにポス

ター、チラシの掲示内容が実際と大きく異なったものになり、ホームページや会場となる予定であった富山市ファミリーパークでの掲示を行いました。ポスターとチラシ表面の下部には「今後、開催の日時や形態を変更する場合もあり得ますので、ホームページ等で適宜お確かめください。」と記していましたが、一部には当日会場に足を運んで初めて延期を知った方もおられました。

アースデイとやまのホームページは、昨年度原因不明の事象によって閲覧不能な状況に陥っていたことが発覚し、従来の URL (<http://earthday-toyama.org>) を引き継いで新たなホームページを立ち上げていました。今年度はそれを活用し、オンライン開催の内容紹介や事前の受付を行いました。ホームページや Facebook は私たちの広報ツールとして大きな役割を果たしています。

マスコミには例年通り富山県庁県政記者室に事前に案内を配布して周知を図り、1 社（北日本新聞）で報道されました（末尾に掲載）。

## ■アースデイとやま 2021 の当日の取り組みについて

「アースデイとやま 2021」は、2021 年 10 月 17 日（日）に ZOOM を用いたオンライン形式で開催されました。協力団体である光教寺（南砺市井波）をホスト所在地とし、テーマである「今こそ、いのちと暮らしが輝くために」を反映した企画を中心に、以下のプログラムで発信を行いました。

- ・ 09 : 30～09 : 40 オープニング 実行委員長あいさつ
- ・ 09 : 40～10 : 20 「トークセッション I 「第一次産業」」
  - ゲスト ① 島田優平 氏（株式会社島田木材）
  - ② 脇山正美 氏（泊漁業協同組合）
  - ホスト 橋本順子 氏（有限会社土遊野）
- ・ 10 : 20～10 : 30 休憩＋関連団体自己紹介
- ・ 10 : 30～11 : 10 トークセッション II 「教育」
  - ゲスト ① 齊藤優華 氏（認可外保育施設寺子こどもえん）
  - ② 関 美佳 氏（寺子屋つながりリンク代表）
  - ホスト 竹中成行 氏（公益財団法人富山 YMCA）
- ・ 11 : 10～11 : 20 休憩＋関連団体自己紹介
- ・ 11 : 20～12 : 20 トークセッション III 「地域づくり」
  - ゲスト ① 能登 貴史 氏（一般社団法人なんと未来支援センター）
  - ② 善田 洋一郎 氏（NPO 法人コクリエ）
  - ホスト 安江 健一 氏（NPO 法人まちづくりスポット）
- ・ 12 : 20～12 : 30 クロージング 実行委員長ほか 総括
- ・ 12 : 30～13 : 30 フリートーク「放課後タイム」（①自然環境、②第一次産業、③地域づくり）

当日はまず実行委員長が開催に至る経緯を語り、簡単な諸注意と各実行委員の自己紹介を行いました。以下は各トークの概要です。

○トークセッション I 「第一次産業」：まず橋本氏から各自の活動やコロナ禍での漁業、林業の現

状について語って欲しいと依頼があり、脇山氏からは漁協の仕事やいくつかの社会的な活動に触れるとともに、生産地での魚価の下落と市場での高騰があったが、巣ごもり事業でインターネット販売が盛んになり、加工を含む6次産業化に活路を見出した、と説明があった。島田氏は林業のさまざまな内容、戦後の歴史について触れ、コロナ禍以前からの問題について語りたいたとされ、輸入材の影響で下落していた木材価格がコロナ禍で高騰し、労力からみて正当な価格になってきたと発言があった。橋本氏からも、大手企業の社員食堂が閉鎖になり、有機農産品の通信販売の売り上げが上がったこと、生産者・消費者を超えた「支えの関係」を構築してきたので、コロナ禍の影響を比較的受けずに済んだことが紹介された。脇山氏からは近年の温暖化の影響と見られる魚類相の変化やプラスチック、ダム排砂など、島田氏からは山林の生態系変化、病虫害の発生など、環境関連の問題が提起された。カシノナガキクイムシの現状に関する質疑があった。橋本氏からは、個人個人が自分ごととして捉えなければならないだろうと指摘があった。橋本氏や脇山氏から、高齢化の進行が懸念されていること、朝日町での町おこし協力隊の活動などの、トークセッション3に通じる指摘があり、橋本氏や島田氏から、今後の農林業の展望に関する発言があった。

○トークセッションⅡ「教育」：主に学校教育以外の、いわゆる「インフォーマル教育」の担い手によるトークが行われた。まず、齊藤優華氏から井波地域での認可外保育施設、「寺子こどもえん」の田んぼや山・池などでの自然や生き物に関する体験活動の報告があった。また、寺子こどもえんでは日頃から地域行事に積極的にに関わり、多様な人々との交流の機会が生まれている。心と身体を育むさまざまな体験やふれあい等、地域全体で子どもを育てる環境が整っていくことが子ども達の豊かな成長に寄与しているとの発言があった。関 美佳氏からは民間教育実践・支援団体「寺子屋つながりリンク」での、「自己肯定力」、「コミュニケーション力」、「問題解決力」を3つの柱にした「生きる力を育む体験型教育」について説明があった。生きる力を育むためには、子ども達が自分たちで考え、挑戦し、失敗してまた考える、といったチャレンジを繰り返し、その後に子ども達が達成感を味わうという体験が必要だと発言があった。現在の学校教育では不十分な点として、齊藤氏からは規模が大きく現場が忙しいために農業体験のような一年を通した活動ができないこと、関氏からはさらにスケジュールが決まっていさまざまな経験をさせてあげられないこと、失敗体験がしづらい状況にあることが指摘された。教育に重要な視点として、さまざまな行動をとれるようになるための経験値や、「何かができなかった時に自分を責めずにできないことを知って這い上がろうとする感覚」としての自己肯定感の意義が取り上げられた。

○トークセッションⅢ「地域づくり」：まず、2名のゲストに各自の活動を紹介していただいた。能登貴史氏は持続可能な社会変化をめざして「市民活動サポートセンター富山」を立ち上げ、「見過ごすことができない社会課題をどう解決したらいいのか」、「仲間がいない」、「エビデンスに乏しい」、「みんなでアイデアを考えたらどう実現できるのか」、「今までの法律や行政の仕組みでは解決できない」、「予算や実行者の不足」などの課題に取り組んで来られた。南砺市では「まちづくり基本条例」（2017年施行）に基づいて新たな組織「地域づくり協議会」（小規

模多機能自治)、「協働のまちづくり支援センター」(協議会への人的支援)、「南砺幸せ未来基金」(協議会への資金的支援)を立ち上げ、市と連携してさまざまな活動が始まっており、「土徳文化」と未来基金、小規模多機能自治の相互補完による持続可能な社会の構築を目指しているとのことであった。善田洋一郎氏は環境問題への無知を自覚することから出発し、山奥の集落に移り住み、林業に出会い、7年間続けた後に朝日町再生会議に参加したのがきっかけで行政職員になり、空き家の問題に出会い、自ら「NPO 法人コクリエ」立ち上げた。そこで「空き家バンク」という活動を始め、地域の空き家、空き店舗などの所有者、利用者、行政の間を回していく活動をしてゆきたいという思いがあり、移動、定住の拠点施設、レンタルスペース、空き家キャンピングなどの取り組みを始めておられた。次に移住者と地域をつなぐ取り組みに的を絞った議論が行われ、善田氏からは町内会のような長期にわたり培われてきた「地域の作法」に移住者は敬意を持つべきであり、まずは自分自身を信頼してもらうことが大事で、それによって自分が紹介した人も信頼されるようになることとされた。能登氏からは、地域は先住者だけのものではなく、移住者が地域を盛り上げていこうとすると先住者に排除されるような地域は廃れていくと指摘があり、皆が語り合う場を作っていくことが一番大切であるとされた。善田氏からは、移住者が地域のコミュニティに入って行かずに地域の良いところだけを持っていく「フリーライド」が一番いけないことで、地域側から見たらそのような多様性には違和感があるとされ、能登氏からは今後5年、10年でフリーライドを嫌がってられない状況になっていくであろうと指摘があった。ここでトークセッションⅠ、Ⅱの担当者にも発言が求められ、橋本氏からはイノシシ対策などで必要な労力を、NPOを立ち上げて確保している事例が紹介された。竹中氏からは子どもの教育におけるさまざまな課題がコロナ禍で浮き彫りになっているが、学校教育だけでは課題の解決が困難であることは明白であり、私達はノンフォーマル教育の重要性を強く感じながら地域と一体になって取り組んでいると発言があり、さらに行政との関係について、能登氏から行政は敵ではないが壁があるのは事実なので、職員が動きやすいような仕組みづくりが重要だと述べられた。

当初のテーマとしては新型コロナの影響が重要な視点の一つだったのですが、それよりも以前から存在するさまざまな課題や、それに対処している関係者の姿が浮き彫りになり、この感染症の影響はそれらの課題に拍車を掛け、巢ごもり需要など一部にはメリットもみられたというのが実態のようでした。参加者の方々、特に地域で同様の活動を続けているの方々には参考になる点が多かったように感じられました。

3つのトークの間の「関連団体自己紹介」のコーナーでは、6つの団体の自己紹介が行われた他、会場となった光教寺の様子もリアルタイムで報告されました。

終了後のフリートーク「放課後タイム」は予定していた3つのブレイクルームにすべて一般参加者の出席があり、さまざまな情報交換が行われました。これがきっかけになって関係者に講演が依頼されたり、一度連絡が途絶えていたつながりが復活するなどの成果がありました。

## ■参加者数、参加者の属性について

昨年度の事前申込者は53名であったのに対して、今年は22人に留まり、その半数は実行委員

会の構成員とトークのゲストによって占められていました。昨年度の参加者には事前にメールで案内を送っていましたが、その中で今年も参加していただいた方は表1の一般参加者のうち2名のみでした。また、これまで対面型のアースデイとやまにボランティアとして参加されていた富山大学関連団体関係者3名に一般参加者としてご参加いただきました。従来の出店者の参加は、実行委員自身関わっている場合以外にはありませんでした。

事前登録者のうち、富山県内からは17名、県外からは5名の参加者（東京都、神奈川、石川、滋賀、奈良の各県）があり、年齢層は20代3名、30代4名、40代7名、50代2名、60代5名、70代1名でした。これらの割合には、昨年と大きな違いは見られませんでした。

表1. アースデイとやま 2021 の参加者内訳  
(事前申込者数および当日の参加者数)

種 別	事前申込	当日参加
実行委員	9	1
トークゲスト	2	4
EDJN*関係者	2	0
一般参加者	9	0
合計	22	5

\*アースデイ・ジャパン・ネットワーク

## ■アースデイとやま 2021 の反省点と今後の展望について

昨年度に引き続き、ZOOMによるオンライン開催となった今年度のアースデイとやまは、参加者こそ少なかったものの、第一次産業やインフォーマル教育、地域づくりの第一線で活躍されている方々をゲストに迎え、充実した討論を行うことができました。新型コロナの影響下で、コロナ禍以前から存在しているさまざまな課題に直面しつつ、地域社会や住民の暮らしを支えようとする人々の姿が浮き彫りになったように思われます。このようなイベントを行うことができたのは、長年にわたるアースデイとやまの積み重ねがあったからでしょう。アースデイ・ジャパン・ネットワークの関係者からも、後日「とやまの参加者の人たちは“熱い”」との感想が寄せられています。しかし、2度にわたるオンライン開催を経て、対面開催に必要な出展・出店者、ボランティア関係者とのつながりが希薄になっていないかは非常に心配な点であり、今回の開催の中で実行委員が直接関わる団体以外の出店者の参加や、ボランティア関係者からの発言がなかったのは残念なことでした。

新型コロナ第5波が県内でやや落ち着いてきた時期をみて、2021年11月4日（金）に実行委員8名が対面で集まり、今年度の反省会を行いました。今年度の到達点や反省点だけでなく、来年度に向けての抱負など、さまざまな視点から意見が交わされた中で、「イベントありきで考えていると、現在のような状況で実際の開催ができなくなると、以降が続かなくなってしまうのだろう」、「トークセッションとイベントを同時に行うと、多くの関係者がトークを聞けないので、トークとイベントを分離するというのを考えても良いかも知れない」といった意見がありました。新型コロナの影響で対面開催ができなくなったことは、結果的にアースデイとやまのあり方を根本から考え直す機会を与えてくれたかもしれません。前述のように、アースデイ・ジャパン・ネットワークでの議論においても全国的なアースデイの減少、縮小化が懸念されており、仮に新型コロナの影響がなかったとしても、全地球的な気候変動の深刻化やSDGsの普及などに伴い、アースデイ自体のあり方が全国的に問い直されていると見るべきでしょう。長期にわたって野外イベントを中心に展開され、経験を蓄積してきたアースデイとやまではありますが、今後は他の地域のアースデイと同様に、多様な開催のあり方が模索されていくものと思われます。これまでのアースデイとやまの歴史の中

でも、2007年には富山県内の関連市民団体の各種活動をアースデイとやまの一部として位置づけ、会場を限定せずに分散方式でアースデイとやまを開催しました。また、2010年の「国際生物多様性年」には通常の形での開催に加えて、生物多様性連続講座を毎月、全12回開催しています。さらに、COP10環境大臣会合が富山で行われた2016年には、通常の形での開催の前日にかなり大規模な「アースデイとやまフォーラム」を行い、「アースデイとやま環境市民宣言」を採択して邦文および英文版を環境大臣会合の関係機関にも提出しました。この他に、いくつかの年において映画上映会や各種のフォーラムを実施しています。このような経験は、今後のアースデイとやまの活動の多様化を模索する上で、貴重な手がかりを与えてくれるでしょう。

その後、2021年12月8日（水）に「アースデイとやま2022準備会」が、2022年1月6日（木）に「アースデイとやま2022第1回実行委員会」がオンラインで開催され、新型コロナのオミクロン株による第6波の到来が問題となる中、2022年の実行委員会の体制や次回のテーマが決まりつつあります。開催形態や具体的な内容は未定ですが、多くの関係者のご協力をいただいて、今後とも取り組みを続けたいと考えています。

## ■アースデイとやま 2021 の会計報告について

最後に、アースデイとやま 2021 の会計（表 2）について述べます。

昨年度からの繰越金は 25 万円ほどでした。今年は昨年同様に富山大学生協からの賛同金がなく、収入は 8 万円ほどにとどまりましたが、一方で支出も大きく抑えられ、総支出額が 12 万円ほどとなりました。来年度の通常の形態での開催には支障のない繰越金を残すことができました。当初対面開催を予定していたため参加登録料を徴収しましたが、一部を除き返金しています。会計監査を 2021 年 12 月 7 日（火）に行い、問題のないことが確認されました（監査報告書は省略）。

表 2. アースデイとやま 2021 収支（左：収入の部；右：支出の部）

	収 入	2021 予算	2021 実績
賛同金	参加登録料	0	38,000
	一般賛同金	20,000	24,000
	富山県生協連合会 後援料	10,000	10,000
	次年度への預かり金	0	12,600
	■小計	30,000	84,600
当日収入	実行委員会収益 ランチ・飲料販売	0	0
	出店者備品レンタル料	0	0
	出店者売り上げ協力金	0	0
	ワークショップ参加費など	0	0
	出店者食器・箸のレンタル収入	0	0
	■小計	0	0
雑収入	かんでんCS エコポイント分入金	0	0
	書籍販売	0	0
	■小計	0	0
合計		30,000	84,600
	前年繰越金	246,792	246,792
総合計		276,792	331,392

	支 出	2021 予算	2021 実績
事務局経費	通信費	2,000	2,364
	事務消耗品費	2,000	0
	事務印刷・コピー費	2,000	0
	会場費（反省会）	0	0
	■小計	6,000	2,364
広告宣伝費	ポスター印刷代 *2種	10,000	9,570
	チラシ印刷代 *15000枚	10,000	8,740
	ポスターチラシデザイン料	50,000	50,000
	ホームページ管理費	12,000	1,639
	■小計	82,000	69,949
当日運営費	当日保険料	0	0
	ボランティアスタッフ食事・飲料	0	0
	オンライン調整費、受付フォーム調整費	20,000	20,000
	■小計	20,000	20,000
実行委員会企画	講師料・交通費	30,000	25,000※
	企画関係補助	8,000	0
	■小計	38,000	0
雑費	備品代他	0	0
	グリーン連合会費	2,000	0
	賛同金返金	0	6,000
	振り込み手数料	2,000	1,860
	■小計	4,000	7,860
合計		150,000	100,173
	翌年度繰越	126,790	231,219
総合計		276,790	331,392

※お一人辞退されたため

参考資料. 写真ほか



# 持続可能な社会考えよう

アースデイとやま30回目 井波でシンポ

## 環境保全 重要な課題



自然環境について考える参加者

環境保全への機運を高めようと、実行委員会（委員長・横畑泰志富山大理学部教授）が毎年開いている新型コロナウイルス感染症防止のため、ビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」を使ったオンライン形式で実施した。

シンポジウムは3部構成。第1部は1次産業をテーマに、泊瀬業協同組合朝日町の脇山正美代表理事組合長と島田木材（南砺市）の島田優平社長が議論した。

地球温暖化について、脇山組合長は約10年前から海水温の上昇で生態系に変化が起きているとし「環境問題は自分ごととして取り組む必要がある」と強調。島田社長は「水は山から下へ流れる。山で仕事をする者として環境を守る責任を果たしたい」と語った。

2部以降は、学校教育の現状と課題、住みやすい地域づくりをテーマに話し合った。

自然環境について考える催し「アースデイとやま2021」が17日、南砺市井波の光教寺で開かれた。30回目の節目を迎えた今年は、記念のシンポジウムでパネ

リストが農林水産業や教育について話し合い、持続可能な社会づくりに向けて意見を交わした。（堀佑太）

2021年10月18日付  
北日本新聞